

何故、キューバはブレず、不屈で確固としており、それ故にキューバ民衆は 勿論のこと、世界の人々、民衆から好かれ慕われるのか？

塩見孝也 2016年12月14日 MiXi

●僕は、前日記で、フィデル・カストロ前革命評議会議長の逝去を哀悼し、キューバ国民(民衆)の哀悼の念や各国首脳のお悔やみのメッセージやその行動を紹介しました。

又、次期アメリカ大統領、トランプの悪罵の言葉も紹介し、キューバ人民と共産党の、ビクともしない、不屈の反撃の態度、行動も合わせて紹介いたしました。

これは、毎日新聞や朝日新聞の記事を中心に引用し、なるだけ客観的に、世界の人々が心底からフィデルを哀悼しているかを広く資料で示し、平明な視野から記述したものです。

今回は、僕のキューバ革命論から、フィデルやチェやラウル等のキューバ共産党の基本的立場、観点、方法を紹介し、何故キューバが、ブレず、不屈で、確固としており、それ故にキューバ民衆は勿論のこと、世界の人々、民衆から好かれ、慕われているかについて、簡潔に述べて見たいと思います。

言いかえれば、キューバ革命が、既成の「国際共産主義運動」に、マルクス主義(とレーニン主義)の原則・綱領的立場を堅守しつつ、どのような思想的・政治的、理論的距離、スタンスをもちつつ、これらの諸国とく和して同ぜず>で、極力、連合して、アクセスしながら進んでいるかを述べてみたいと思います。

● キューバ共産党(カストロイズム)を構成する原則的、綱領的見地とは何か？何故、キューバ革命は、ブレず、一貫し、確固としており、自国と世界の人々から愛されるのか！

それは、主観的、主体的要因と客観的な歴史的な要因が合わさって、生まれてきている、と思います。以下、主観的、主体的要因(a)と客観的、歴史的、(b)、(c)、(d)を語り、このことを明らかにして行きたい、と考えます。

◆(a)—先ず(a)の中心的要因から述べます。マルクス主義の創始者、マルクスとエンゲルスは、「資本論」に著わされる原理的にして、原則的な資本主義批判を基礎とすることで、共産主義論を打ち立て、そこから、「過渡期社会論」を確立して行きました。

キューバ共産党は、このマルクス(エンゲルス)の「過渡期社会論」を、自らの社会規定の原理論的ベース、すなわち綱領上のベース、核心に据えていたからこそブレず、一貫し、確固としており、自国と世界の人々から愛されたと考えます。

フィデル達は、マルクス・エンゲルスの打ち立てた資本主義批判・(世界)社会主義論・過渡期社会論を政治的・思想的、理論的な基本指針・基本規準とすることで、現代過渡期世界における世界同時革命路線・戦略を確定して来ました。そこから、国際・国内情勢分析・戦術・政策を引き出して来た、と思います。キューバ人と社会は、このようなマルクス主義の原則的観点に立脚して、キューバ「過渡期社会」を築いて来ました。それ故に、キューバ社会は、一方で、マルクス主義を指針とする革命社会、国家であり続け、他面では、この社会の歴史的実情に適合した、生命的な躍動性を持った社会としてあり続けて来ました。

マルクス・エンゲルスの「過渡期社会論」は以下の如く措定されています。

① 二人のマルクス主義の創始者は、<(科学的)資本主義批判>をベースとすることで、資本主義社会の経済的運動法則を解明、理解したこと。この成果があったからこそ、二人は共産主義社会の理論的規定を経済(学)の面から接近し、措定することが出来ました。いわゆる、唯物弁証法、唯物史観、経済学としての<資本論>を基礎として、共産主義論を打ち立てることが出来たこと。いわゆる、科学的社会主義の立場、観点、方法によるものです。

二人の共産主義社会論は<生産力が低い段階の共産主義社会>と<生産力が高く、前者が、もっともっと発展した経済的にも、道徳的にも圧倒的に高い段階の共産主義社会>の二つの段階のプロセスで構成される、ものでした。そして、<生産力の低い段階>の<共産主義社会>を彼等は<社会主義社会>と呼んでも良いとしました。

これは、<資本論>で著わされた資本主義の経済的運動法則の解明から、純理論的な帰納法(あるいは演繹法)として抽象されるもので、もっとも科学的な措定方法に立脚するものでした。

(実際には、この二つの段階の共産主義は、いずれも、世界大、世界範囲で形成される世界社会主義、世界共産主義社会としてしか、創出されないこと。少なくとも、資本主義の未発達な国での民主主義革命を達成した国と違って、高度に発達した先進資本主義国の一国から数力国で、社会主義革命を実現した段階でのみ、出現すること。それ故に、それまでは、あくまで、共産主義を目指すにしても、独立と民主主義を達成した社会ではあっても、社会主義社会ではありえず、<過渡期社会>でしかあり得ないこと。

②このような、共産主義論の科学主義的措定が出来ると、次の理論的、思想的・政治的課題として、<資本主義から共産主義(社会主義)への移行期>が、どのように展開されるのか、が二人にとって課題となって行きます。

二人は、この<移行期>を、先ず「過渡期社会」と命名しました。更に、この<過渡期社会>は、<プロレタリアートが、ブルジョアジーを始めとするこの自階級以外の階級を独裁する、(独裁しなければならぬ)社会であることと定式化しました。

この<過渡期社会>は、<社会主義>を目指す、決して現実に、目指している社会そのものが<社会主義社会>ではなく、現実に目指している社会は、厳然として、階級社会であり、階級闘争が継続し、国家も死滅していず、逆に、国家を必要としているとさえ言える社会であること。

時には、革命的マルクス主義共産党が生み出されることで、この階級闘争に正しく対応し、共産主義(社会主義)を目指す共同体(協同体)社会が、政治の優位性でもって継続される社会ともなれば、時には、反対に、反革命によって、資本主義に逆転する可能性も有す社会であること。こう二人は規定し、<過渡期社会>では、プロレタリア階級独裁の政治体制を質・量ともに強化してゆくことを強調しました。その使命は「内」にあつては、プロレタリア独裁で革命を継続する社会、「対外的」には、インターナショナリズムを貫き、世界革命の根拠地化足らんとする社会であること。

二人は、<共産党宣言>が書かれた1848年の時期で、既に「世界同時革命論」を主張していました。これは、二人の著作、「共産主義の原理(や<ドイチュ・イディオロギー>)」の叙述で明白であること。

しかし、二人にしても、「資本主義後の社会」が、どのように出発し、共産主義がどのように成

長・発展して行くかについては、未だ<資本論>も完成していない段階であり、曖昧であったこと。

その後、<資本論>を完成させた1860年代後半から70年代では<資本主義社会の経済的運動法則>が二人によって、科学的に解明され、理解される段階に達していたので、マルクスの晩年において、二人は「ゴータ綱領批判」の文章の中で、「資本主義後の社会」=「資本主義を揚棄した社会」は、「<過渡期社会>→世界的規模で成立するが未だ<生産力が未熟で低い社会主義社会>→<生産力も道徳も発達した共産主義社会>」というプロセス、道筋を通じて、共産主義社会は成長・発展して行くと定式化して行きました。

そして、この二つの段階の<世界共産主義>の前段に、この共産主義に移行して行く社会として「過渡期社会」が存在すること。その様な社会は「プロレタリア独裁の政体を持つ社会」である、と明白に展開し、その、細部についても、可なり詳細に規定しています。

フィデル(やチェやラウル)らキューバ共産党指導部は、この「ゴータ綱領批判」に展開されているマルクス・エンゲルスの「過渡期社会論」の諸原則に忠実に従って、スターリンの「一国社会主義論」をすっ飛ばして、自らのキューバ<過渡期社会>を維持、建設して来ました。すなわち、「内」にあつては、<共同体(協働体)>を、「労働時間に応じた分配」を経済的規準としつつ、「公平で平等な社会」(その意味で<自由>な)、「人間の尊厳性を持った社会」を継続的に建設しつつ、「外」に対してはインターナショナルな、将来の<世界社会主義(世界産主義)>を目指す「世界革命の根拠地国家化」を目指して来たこと。これは、全く素晴らしい成果と言えます。

しかし、二人の「世界同時革命」論は、主としてヨーロッパ(とアメリカ)のみのプロレタリアートの社会主義革命であり、初期は、植民地・半植民地国や東欧・北欧での独立や反植民地・民主主義革命や反属国化革命は、余りにも当時は隷属的状态が深かったので、二人は諦念的態度を採り、この地域の変革を除外していたこと。この意味で、「共産党宣言」発表頃の、二人の「世界同時革命」論はヨーロッパ大陸規模のものでしかなかったし、問題があったことも押さえられておくべきです。

③ しかし、晩年、二人は、この態度を強く自己批判し、アイルランドの独立闘争、ポーランドの独立闘争、インド・中国・インドネシア・南米、アラブ・アフリカ諸国の反帝国主義革命を支持し、この革命運動が、世界同時革命の重要な、無くてはならぬ構成物であること。換言すれば、世界プロレタリア社会主義革命の重要な一環、構成物と位置づけ、世界同時革命は文字通り、地球的規模で実現、創造されていく、という認識へと自らの認識を進化(深化)させて行きました。

二人は、自己否定的に自己変革しつつ、これまでの<世界同時革命>捉えなおし、再構成し、止揚して行った、と捉えられます。

このような、自己否定、自己変革による捉えなおしは、資本主義批判を単に搾取の問題、労働運動の前進の問題に短絡できない、と捉え、二人の世界観は人種差別、民族差別、部族・氏族差別の克服に深まっていったし、そればかりではなく、ジェンダーの問題、女性差別との闘いの分野でも、深まっていった、と思われまます。

この、二人の自己否定的なく世界同時革命>の自己変革の営為を受け止め、継承したのが、レーニンであり、レーニン存命のコミンテルンであった、と言えます。

しかし、レーニン死後、その前後から、すぐに、このようなマルクス主義とレーニン主義の世界同時革命の世界戦略を否定・投げ捨て、マルクス主義とレーニン主義を否定・修正する様なとんでもない事態が、世界革命の根拠地を自認するロシアの地から発生します。

これが、スターリンの「社会主義は、一国でも実現可能である」とする「一国社会主義」論の謬論であります。マルクス主義を根本から修正するようなスターリニズムが現れたわけです。

マルクス主義は、スターリン主義によって裏切られ、その共産主義運動は、インターナショナリズムから「一国社会主義建設可能論」を持って、ソ連中心の、ソ連に奉仕する、国家主義と民族主義を孕んだものに変質せしめられて行ったのです。

この「一国社会主義論」を、理論的・思想的ベースにして、マルクス主義にあってはならない指導者の個人崇拜や粛清の恐怖政治が蔓延して行きます。「マルクス主義の創設者の「世界同時革命論」は、最早古臭くなって、時代に合わなくなった」「今の時代は、先ずソ連を先進社会主義国にすべく、インターナショナリズムはソ連建設に奉仕すべきである」「社会主義は、ソ連を中心に、一カ国から数カ国に徐々に拡大してゆく」と主張してゆくのでした。スターリン・コミンテルンは、この路線やスターリン崇拜を実現するための道具にされ、以降、沢山の政治的な致命的過ちを犯して行きます。フィデルらが、後の世で、いつも持ち続けた、理想主義に匹敵するような第二インター時代にも、相当あり、レーニン時代に確固としてあった理想主義はかき消されて言ったのです。

そして、我々は確認してゆかなければならない。

この「一国社会主義」論の修正主義、国家主義、民族主義を乗り越えて、原初のマルクス主義の世界同時革命論と過渡期社会論の諸原則を復権して行ったのが、キューバ革命に体现されるスターリン主義に影響を受けないで、育った、戦後世代を代表するカストロイズム(=ゲバラ主義)の世界同時革命思想であった、と言えます。

キューバ革命は、直感的、本能的といえる、独自の思想に導かれ、創造されて行った、と捉えられます。それは、結果的には、マルクス(エンゲルス)の資本主義批判と世界同時革命—「過渡期社会」論を、ロシア革命以降の世界を、「革命の場の位相転換」と捉え、まっすぐに、文字通りに、「資本主義から社会主義に移行して行きつつある」世界、すなわち、<世界的規模での過渡期時代>、<過渡期世界>と捉えていった、と言っても良いと思います。

④「過渡期世界」の中での、「過渡期社会」は、これまで、述べてきたように<内>にあっては、プロレタリア独裁を打ち固め、革命を継続させること。<外>に対しては、世界革命の根拠地国家化を目指すことを目標とする。対内<継続革命>と対外<根拠地国家化>は、全く一個二重の一体的な双方向的変革関係に立つ革命であるべきでした。

このような、<継続革命>と<根拠地化>を追求する「過渡期社会」国家が、史上初めてロシアに出現したことは、世界史に新紀元を切り開き、世界史は、<資本主義から社会主義への移行期>に入って行ったことを意味します。僕は、このような世界史の時代を、「過渡期世界」と命名したのでした。

このような時代の出現は、レーニンがマルクス唯物弁証法・唯物史観に忠実で、マルクス主義経済学に通じていたからこそ、可能であったといえます。

各国の革命は、その「革命の総和」ではなく、「単一の資本制ブルジョア独裁打倒と社会主義を目指すプロレタリア独裁の世界階級闘争、世界革命戦争として闘われるように、位相転換を起こしたのである。ロシア革命以降、革命の<場>が、<過渡期世界>に位相転換したのです。

「過渡期世界」論は、唯物弁証法や唯物史観を基礎とし、革命的マルクス主義経済学と世界社会主義革命論をもって、「革命の場の位相転換」が始まったことを、象徴的に表現した政治用語であります。

◆(b) — 以上の如く、フィデル達は、マルクス主義の世界観、諸原則に忠実で、スターリン主義

を理論的にも、政治的・思想的にも、組織的にも批判的に、対し得たこと。この様な、これまで語ってきた(a)の部分が、フィデル達のキューバ革命の思想的・理論的核心であります。この核心を支え、補完する従属的核心として、次の(b)、(c)、(d)があつて、キューバ革命は成功し、今でも継続させた要因なのですが、先ず、(b)から語ります。「革命的政治的指導者、前衛は軍事的指導者としても、才質を持たなければならぬこと。」。

＜前衛の軍人化＞の問題をカストロは十分にクリアーしていたこと。いわゆる、「前衛の軍人化」論は、レジス・ドブレの＜革命の中の革命＞という著作に展開されている主要観点であるが、彼個人の未熟さが関連し、幾つもの彼流の偏向も混入されています。とは言え、この本の基本的主張点は、フィデルの思想・主張であつたこと。

フィデル達は、グランマ号で88人で祖国に上陸しましたが、バチスタの攻撃に遭って、20名弱となり、シエラマエストラ山にたどり着きます。ここを、革命戦争のゲリラ戦争の根拠地にしつつ、革命軍を拡大して行きます。この根拠地は、バチスタ軍と日々、日々するのですから、指導者、指導部は、軍事に通じていなければなりません。思想や政治、全国の情報に通じ、根拠地を維持するための経済にも通じていなければなりません。何よりも軍事に通じ、根拠地を守り抜いて行かなければなりません。この意味で、政治的前衛は、卓越した軍人でなければならぬことが要求されます。軍事は、あくまでも「政治の別の手段による、政治の延長ある」ことが押さえられて置くべきですが、レーニンのような、或は、ロシア内戦やパルチザンのように、党と軍を機械的に分けてゆくようなシステムは、政治的文章を書くこと、新聞を出すことを第一義にすることは出来ません。シエラマエストラ山の根拠地建設は、毛沢東が井冈山に根拠地を作り、立て籠もり、これが、農村から都市へ広がっていった、出発点となつたことと同質の特質を持っていた、ともいえます。

◆(c)ーホセ・マルティーは、スペイン重商主義帝国主義と闘ったが、スペインを追い出した後、その後釜に座らんとする最新で最強の資本主義、最強の帝国主義、アメリカ帝国主義との闘いこそが本番で、最重要であると警鐘を鳴らした人であること。

マルティーは、もっとも資本主義が発達し、世界を支配しつつある最強の資本制帝国主義、アメリカ帝国主義からの独立・自主の革命事業の完遂は容易ならざることを警告し続けました。そのためには、この新しい資本主義の段階に達しつつあるアメリカ帝国主義に対して、その科学的批判を習得すべきことを主張し、キューバ革命を継続しようとするれば、革命継続と世界のあらゆる反米勢力と連合し、米帝打倒の世界革命戦略を打ち出し、キューバ国を根拠地国家化し続けなければならないことを予見していました。

フィデルは、このマルティーを敬愛していたこと。アメリカ帝国主義と闘い、独立を堅持することは、アメリカ帝国主義が世界資本主義の牙城である事からして、その目と鼻の先の、革命戦争の最前線で闘い抜くには、反帝・反米の世界革命を世界革命戦略として持ち、反米のどの勢力とも、極力、全方位の外交で、連合しなければならないこと。ここに、キューバが、マルクスの＜世界同時革命＞を継承し、＜過渡期世界論＞を確立しつつ、＜3ブロック同時革命＞を追及する核心があつた、とおもいます。マルティーはこのことを、教えてくれたわけです。

◆(d)ー中南米、カリブ海地域、南米大陸(や北米大陸)、一括してアメリカ大陸(西半球)はヨーロッパやロシア、中国らアジアとも違うラテン・アメリカ大陸独自の革命戦争の思想・戦略一戦術が問われます。フィデルらは、このラテン・アメリカ特有の歴史的に形成されてきた文化、文明に根ざすことで、革命戦争を可能にし、かつ実現した革命を維持、存続させて来ました。とりわけ、キューバは、それを可能とする歴史的、文化的条件を有していた。

シモン・ボリバルの単一の南米大陸革命(中南米、カリブ海地域を含む)は、このカストロやゲバラが目指した世界同時革命の先駆であり、マルティもボリバルをカストロやゲバラは尊敬していました。

キューバには、混血した<キューバ人>はいたが、血統を共有するようなくキューバ民族>は居なかったし、今でも居ない。言い換えれば、キューバは、遠く1万五千年前、アメリカ大陸にやってきたモンゴロイドのアジア人の原住民(この大半は殺された)、スペイン・ポルトガル・イギリス・フランス人によってもたらされたアフリカから連行されて来た黒人奴隷を先祖に持つ人々。そして、

ピサロやコルテスのような侵略者、征服者、略奪者、殺戮者に代表されるような スペイン・ポルトガルのような重商主義の征服・略奪帝国主義者達や海賊行動を国家的に推奨し、スペイン・ポルトガルとカリブ海で覇を競い合った、英・仏の産業資本主義の帝国主義者を子孫に持つような白人達が居た。キューバ人は、この三者の混血であり、この混交の歴史を典型的に代表していました。それ故に、国家・民族よりも、これを超えた国境なき世界革命のインターナショナリズムを許容する歴史的な文化的、文明的伝統を本能的に活かしたのでした。この融通無碍な伝統が、キューバ革命の明るさ、陽気さ、戦闘性と原則性を培養してきたことでした。

以上、(b)、(c)(d)は、核心だけ述べ、端折って来ましたが、(a)を中心とする(a)～(d)の4点が、冒頭の問題設定に応える回答と考えます。

尚(a)～(d)は機会を変えて、別にもっと詳細に論ずることをお約束いたします。

参考文献として「キューバを知るための52章」「早分かりアメリカ」「ゲバラの実像」「心豊かなキューバ」「あつけらかんのキューバ」「地球の歩き方ーキューバ&カリブ海」。

DVD:「チェー28才の革命」「チェー30歳、別れの手紙」

僕のミクシー9月25日の日記:「キューバ評価をめぐって六文銭さんへの反批判」では、キューバの現状が述べられています。参考になると思います。